

ブッダとマハーヴィーラの共通要素
 —Āyār. II. 15 and Dhp. 183: Isibh. 29. 19 and
 Dhp. 360, 361—

渡 辺 研 二

I. 仏教から：七仏通戒偈

七仏通戒偈とされる Dhammapada (パーリ『法句經』) 183 (韻文)

Sabbapāpass' akaraṇaṃ kusalass' upasampadā

sacittaparyodapanaṃ etaṃ Buddhāna sāsanaṃ. Ed. by Fausbøll (2nd. ed.)

cf. Dhammapada, ed. by O. Von Hinüber and K.R. Norman. Pali Text Society.

Oxford, 1994

「すべて悪しきことをなさず、善いことを行ない、自己の心を浄めること、—これが諸の仏の教えである」中村元訳『ブッダの真理のことば・感興のことば』岩波文庫 東京 1978. 参照：「諸悪莫作 諸善奉行 自淨其意 是諸仏教」『法句經』大正4, 567c

II. ジャイナ教から：マハーヴィーラの出家の決意

この Dhammapada 183, にたいし現在まで学者によって、第四句 etaṃ Buddhāna sāsanaṃ にジャイナ教の聖典 Isibhāsiyāiṃ (『聖仙の語録』) の eyaṃ buddhāna sāsanaṃ, Isibh. 38. 4d. の並行詩句が指摘されている(中村元「サーリブッタに代表された最初期の仏教」『印度学仏教学研究』第14巻第2号)。ここはジャイナ教の伝える Isibhāsiyāiṃ (『聖仙の語録』) の中に仏教の仏弟子知恵第一の舍利弗説の文句として伝えられるものである。つまり、ジャイナ教聖典が、これは仏教徒の表現であるといっているものが、実際に仏教の Dhammapada 183d 第四句に存在しているということが確かめられる。

これに加えて、ジャイナ教固有の伝承として、Dhammapada 183ab, 第一、二句にたいし、

“savaṃ me akaraṇijjaṃ pāvakaṃmaṃ”

ti kaṭṭu sāmaiyaṃ cārittaṃ paḍivajjai. (散文)

「わたし (マハーヴィーラ) は、すべての悪しきことをなさいようにしよう」と考えて、サーマイカ行 (= 平静の行) を受け入れる [行う] prati-√pad.

Āyāraṅga-sutta, II. 15. Agamodaya ed. 424a

を並行する表現として指摘したい。この Āyāraṅga-sutta のくだりは、ジャイナ教の第24祖師マハーヴィーラが、一切の所有物を捨て去って、出家するさいの重要な伝承である。つまり出家直前のマハーヴィーラが五握みの髪を引き抜いて、過去の完成者たちに敬意を払った後で立てた、「誓いのことば」として伝えられるもので、ジャイナ教ではマハーヴィーラの出家時の状況、出家の決意を伝える重要な伝承である。これは、出家直後の誓いであるから、当然マハーヴィーラ自身の宗教体系が確立されていた訳ではない。おそらく彼以前の沙門やバラモンの思想を伝える苦行者の伝承を伝える古いニガンタ派の宗教思想を受けたものと思われる。これは、仏教における Dhammapada 183 が「七仏通戒偈」とよばれ、ゴータマ・ブッダではなく過去七仏の伝承とされることと軌をいつにしよう。この Āyāraṅga-sutta の当外箇所 のすぐ前に、仏教では過去仏に相当するジャイナ教の完成者たち (Siddha) つまりマハーヴィーラ以前の Tirthamkara (渡し場を作る者=救済者) たちに敬意を表している。samaṇaṃ bhagavaṃ Mahāvire…Siddhāṇaṃ namo-kāraṃ karei. (沙門尊者マハーヴィーラは、…完成者たちに敬礼をする) という表現がみられるのは注目に値する。マハーヴィーラもまた、過去の完成者たちから精神を受け継いでいるのである。白衣派は彼の両親がジャイナ教の第23祖師 Pāsa の信徒であったと記していることも、マハーヴィーラが彼以前の古いニガンタ派の影響下にあったことを示唆するものであろう。「諸悪莫作 諸善奉行」については、Dhammapada の kusala と Āyāraṅga-sutta の sāmaiya は心の平静を説く、内容的によくにているものである。ブッダもマハーヴィーラも共に、字句も内容も同じようなものを用いて表明していた、といえよう。

Pāli, pāpa/AMg, pāva, kusala/sāmaiya 等の字句の比較検討は、K. Watanabe, “Avoiding all sinful acts by both Buddha and Mahāvira” (Dhp. 183 and Ayar. II. 15), in Bulletin d’ Études Indiennes 11-12, Paris 1993-94. を参照。

Ⅲ. 感覚器官の制御について：仏教 Dhammapada 360, 361から

Cakkhunā saṃvaro sādhu, sādhu sotena saṃvaro,
ghāṇena saṃvaro sādhu, dādhu jivhāya saṃvaro. Dhp. 360

Kāyena saṃvaro sādhu sādhu vācāya saṃvaro,
 manasā saṃvaro sādhu, sādhu sabbattha saṃvaro,
 sabbattha saṃvuto bhikkhu sabbadukkhā pamuccati. Dhp. 361 Ed. by Fausbøll
 (2nd. ed.)

和訳：

三六〇 眼について慎しむのは善い。耳について慎しむのは善い。鼻について慎しむのは善い。舌について慎しむのは善い。

三六一 身について慎しむのは善い。ことばについて慎しむのは善い。心について慎しむのは善い。あらゆることについて慎しむのは善いことである。修行僧はあらゆることがらについて慎しむ、すべての苦しみから脱れる。

中村元訳『ブッダの真理のことば・感興のことば』岩波文庫 東京1978.

ここでは、眼耳鼻舌、身口意についての saṃvara が説れているのが注目される。後で述べるように、「業の流入の阻止」を意味する saṃvara は、ジャイナ教とも共通の重要な語である。

IV. 感覚器官の制御について：ジャイナ教 Āyāraṅga-sutta,

II. 15から

マハーヴィーラの説いた五大誓 (pañca mahavvaya) の解説のなかに「感覚器官の制御」の記述がみられる。それぞれ耳、眼、鼻、舌、皮膚について次のように言われている。

「耳によって、人は快・不快の音を聞く。快・不快の音に執着してはならない喜んではならない、欲してはならない、心を乱してはならない、食欲になってはならない。…省略…音が耳の対象に達したとき、(その音を) 聞かないわけにはいかない。

(音を聞いた場合) そこで、愛憎が生ずるが、修行者は、それを避けるべきである。…省略…耳から、人は快・不快の音を聞くのである。これが最初の bhāvaṇā である」

耳以下、眼、鼻、舌、皮膚について同じことが繰り返して言われる。

V. 感覚器官の制御について：Isibh. 29 から

この Āyāraṅga-sutta II. 15の箇所は、マハーヴィーラの言葉として、より古いジャイナ教の聖典『聖仙の語録』のなかに見いだすことができる。

saddaṃ sotam uvādāya maṇuṇṇaṃ vā vi pāvagaṃ
 maṇuṇṇammi ṇa rajjejjā, ṇa padussejjā hi pāvae (3)
 maṇuṇṇammi arajjjante aduṭṭhe iyarammi ya

asutte avirodhīṇaṃ evaṃ soe pihijjati (4)

ruvaṃ cakkhum uvādāya…(5)(6)

gandhaṃ ghāṇaṃ uvādāya…(7)(8)

rasaṃ jibbhaṃ uvādāya…(9)(10)

phāsaṃ tayam uvādāya (11)(12) Isibhāsiyāṃ 29 (Ed. by W. Schubring)

「(3)快い音あるいは悪い音を耳から受け取っても、快い音において愛着をおこすべきではない。悪い音について怒るべきではない。

(4)快い音において、[人が] 愛着をおこさず、他のもの(悪い音)において怒らず、業の流れをせき止めていない者たちのなかにあっても (avirodhim)、眠らずに(気をつけて) いるならば、かくして業の流れはせき止められる。

(5)(6)快いあるいは悪い色をと眼から受け取って、…

(7)(8)快い香あるいは悪い香を鼻から受け取っても、…

(9)(10)快い味あるいは悪い味を舌から受け取っても、

(11)(12)快い感触あるいは悪い感触を皮膚から受け取っても、…」

とあり、感覚器官からの刺激を感受することから生ずる「業の流入の阻止」(soe pihijjati) が説かれている。この『聖仙の語録』のうちマハーヴィーラの言葉伝える29章の末尾の詩節は、マハーヴィーラの教説を、つぎのようにまとめている。

savvattha viraye dante savva-vārihiṃ vārie

savva-dukkha-ppah-ṇe ya siddhe bhavati ṇiraye. Isibhāsiyāṃ 29. 19

「一切のところにおいて、汚塵を離れ、制御されていて、一切の制御よって[業の流入を] せき止めている、また一切の苦しみの尽きた人は、汚れない完成者となる」

Isibhāsiyāṃ 29. 19 と Dhammapada 360. 361 とは並行関係にあるといえる。

とくに、sabbattha saṃvuto bhikkhu sabbadukkhā pamuccati. Dh. 361 は Isibhāsiyāṃ 29. 19 と並行関係にある。

IV. まとめ

以上で、Āyāraṅga-sutta II. 15のマハーヴィーラの「誓の言葉」伝承と「七仏通戒偈」として有名な Dhammapada 183 とは並行関係、そしてさらに、マハーヴィーラの言葉とされる Isibhāsiyāṃ 29. 19 は Dhammapada 360, 361 と sam √vr̥ をめぐって並行関係にある、ということを指摘し得た。sam √vr̥ は「業の流入の阻止」を意味する言葉で、仏教とジャイナ教に共通の重要語である。そして、さらに加えていえば、この Isibhāsiyāṃ 29. 19 と並行関係にあるジャイ

ナ教の祖ニガンタ・ナータブッタの教説としてパーリ『沙門果経』のテキストのなかで繰り返される *sabba-vāri* (*sabba-vāri-vārito*) は、語形・意味ともに不可解であり、かつ難解で知られていた有名な表現であった。ところが、この表現は、仏典自身が伝えているように、じつにジャイナ教の古聖典に伝えられるマハーヴィーラの教説に由来することが、最近判明した(渡辺研二「ニガンタ・ナータブッタ説再考—ジャイナ教文献からみた『沙門果経』の六師」『三康文化研究所年報』13号, 1981年。K. Watanabe; “Some notes on the expression *sabba-vāri* / *savva-vāraṃ*”, in *Bulletin d'Études Indiennes* 5, Paris 1987.)。驚くべきことに仏典は、そのなかに極めて直接的に、しかも正確にライバル宗教の教祖の教説を伝えていたのである。このテキストの難解さ、不可解さはテキスト自身によるものではなく、それを伝持し、解釈する側にあったと、渡辺は指摘した。ここは「様々な悪からの防御」すなわち「感覚器官からの業の流入の阻止」を説いていたのである。さらに、渡辺は、現存仏典とジャイナ教聖典の伝える仏教のゴータマ・ブッダとジャイナ教のマハーヴィーラとの教説の根底に、かつて、京都の榎本文雄が「*āsrava* (漏)の成立について——主にジャイナ古層經典における——」『仏教史学研究』第二二巻第一号1979のなかで、ヴェーダ、仏典、ジャイナ教聖典を精査して、明らかにしたような、ジャイナ教教的な *saṃvara* つまり、「本来清浄なる靈魂に業の流れが流入するのを防ぐ」という趣意が見て取れることを指摘した。仏典自らが、マハーヴィーラの教説であるといっているものが、ジャイナ教聖典のなかにそのままそっくり見いだされることが重要で、これは仏教徒とジャイナ教徒とはお互いの事をよく知っていた、それを正確に保存していたということを示唆するものであろう。仏教とジャイナ教ともに、彼ら自身が古い伝承であるといっているその資料に具体的に両者の説教が「諸悪莫作」や「感官の制御」について、それも仏教を代表すると従来みなされていた詩節に、ジャイナ教の聖典に字句を含めその内容も一致しているということが、推測ではなくて、具体的に現存聖典のテキストに辿れるということを示し得たと考えられる。そして、彼らのいう「感官の制御」は *Mahābhārata Bhagavad-Gītā* に伝えられる素朴な *Sāṃkhyā Yōga* の道のうちのヨーガの記述とほぼ一致するのである。

〈キーワード〉 Mahāvīra, Jaina, Āyāraṅga, Isibhāsiyāṃ, Dhammapada

(淑徳短期大学非常勤講師)